

# ベトナムの中学1年生における喫煙に関する 意識調査と禁煙授業に関する研究

056

○三浦佐智子（東京都町田市立南つくし野小学校）  
井上 洋士（放送大学大学院）

【背景】ベトナムの小学校では保健指導に薬剤師が関わっているが、禁煙指導内容に悩みを抱えている状況にある。また一般に日常生活では喫煙が習慣化している実態がある。これらに対してなんらかの対応策を練る必要性がある。【目的】ソーシャルマーケティングに照らし、ベトナムの一地域の子ども達を対象として、禁煙や喫煙に対する意識を明らかにし、それを基に禁煙授業を実施、そのアウトカム評価とプロセス評価をする。

【方法】調査対象はベトナム公立学校の中学1年生、A、Bクラスの78人。形成調査の位置づけで意識調査実施後、日本の養護教諭がモデル禁煙授業を介入として行った。その後プロセス評価・アウトカム評価の調査を実施した。Aクラスを介入群とし、早期に授業を実施し、Bクラスは対照群とし、遅れて授業実施の2クラスに分け、調査と授業を実施した。回答の得られたA、Bクラスの計54人の回答データを分析対象とした。

【結果】禁煙授業受講経験：「なし」と回答したのが92.5%。周囲の喫煙環境：喫煙経験のある父親は、68.6%で現在も喫煙が51.9%と高い結果であった。母親の喫煙率は1.9%と低かった。周りの人の喫煙状況：「全くいない」が24.1%、「あまりいない」が25.9%、「たくさんいる」「少しいる」を合わせると50.0%であった。本人の喫煙状況：「煙草を吸ったことがない」は98.1%で、「煙草は吸いたくないと思う」は92.5%であった。喫煙についての認識：受動喫煙を避ける事の困難さは「大いに大変」「まあ大変」が79.6%。

煙草の煙を吸わない方法をやってみようと思うかについては、「大いにやってみようと思う」「まあやってみようと思う」を合わせて78.6%。その反面「あまりやってみようと思わない」「全くやってみようと思わない」を合わせると16.7%であった。アウトカム評価：介入群では対照群と異なりモデル授業前に比べて後に、煙草を吸うことは周りの人の体に悪いと認識する子どもが多くなる傾向にあった。プロセス評価：全体としてモデル授業が受け入れられていた。【考察】ベトナムの子どもたちは、煙草を吸ったことがなく、煙草を吸いたいと思っていない、将来煙草を吸わないと思っているのが各々ほぼ全員であった。家族とその周りには、でも喫煙する人は多く、煙草の有害性はほぼ全員で認識されているが、煙草の授業を受けたことがあるのは1割に満たない結果であった。このような実態のなか、喫煙率が下がらないのは、大人になるにつれ喫煙の機会を獲得することが考えられる。その要因を探る必要性和子どもの頃からの禁煙教育が示唆される。また、日本の養護教諭が禁煙授業を実施しても、その効果があることが判明した。【結論】ベトナム公立中学校の1年生を対象とし、形成調査の後に日本の養護教諭が主体となってモデル禁煙授業を実施したところ、モデル禁煙授業は有効であることが示された。

(連絡先)三浦佐智子 所属名：町田市立南つくし野小 住所：〒194-0002 町田市南つくし野2-4-8